

## エリザベス・ビショップ 断章

1. ムーアへの招待状
2. 光と影、空と海、そして家など
3. 「雄鶏」とムーアの「センザンコウ」
4. セスティーナ

森 田 孟

### 1. ムーアへの招待状

Elizabeth Bishop は、Vassar 大学の4年生の時、思いがけなくも、そして甚だ幸運にも、Marianne Moore と逢うことができた。<sup>(1)</sup> 大学図書館の司書 Miss Fanny Borden が Moore を小さい頃から知っていて、Bishop を紹介してくれたからである。Borden 女史は、それまでも何人もの女学生を Moore に引き合わせてきたが、彼女らの誰一人、Moore の気の入った者はいなかった。しかし、Bishop は、気に入られて、以後、母親と同居していた Moore の Brooklyn のアパートに出入りして、Moore 母娘から可愛いがられた。Moore 家を辞去する時は、常に限りない幸福感に満たされたことを、Bishop はその「思い出」の中に記している。「心が昂揚し、靈気を吹き込まれさえし、立派になろうと決心し、もっと一生懸命に働こう、他人の思惑など気にせず、最善を尽したと思えるまでは何も出版しまい、例え何年かかろうと、或いは出版せずじまいになろうと、と思ったのでした」<sup>(2)</sup>と。彼女はこの思いを生涯貫いて、寡作に終始し、彫琢に彫琢を重ねた珠玉のような作品を公表した。彼女の『全詩集』<sup>(3)</sup>に収められている詩は115篇、50年余の間の詩作品である。この『全詩集』を書評した詩人 John Ashbery に、この本の標題が誤りであって、もっと作品が、少なくとももう一冊の『全詩集』があつてほしいと、人は望む、と言わせた程である。<sup>(4)</sup> 1977年の George Starbuck との会見では、Bishop は、時々私は自分が男に生まれていたら、もっと沢山詩を書いただろうと思う、もっと詩作に時間を使えたらと思う、私は大変無駄に時間を費してきた、と嘆くようなことを述べているが、<sup>(5)</sup> 結局は Moore を見習った完璧主義者で彼女もあつたということだろう。その会見で、Bishop は、Moore は皿洗いをしたり掃除をしたりする間も、詩作のための紙挟みを家の中じゅう絶えず持ち歩いてたと、証言しているし、本当の仕事の例をみたいと思ったら、Moore の草稿を研究しなさい、とも語っている。<sup>(6)</sup>

1948年の春、Bishop は「M. M. のために」“For M. M.”と題する作品を発表した。<sup>(7)</sup>後に第二詩集に収録する際、「マリアン・ムーアさんへの招待状」“Invitation to Miss Marianne Moore”と改題された詩である。<sup>(8)</sup>各詩節がそれぞれ、8, 9, 6, 6, 7, 12, 5, 5行から成る8連の、計58行の作品で、「どうぞ飛んで来て下さい」“please come flying”なるリフレイン（反復句）が12回使われている。長年一緒に住んできた母親に死なれて孤独に苛まれていた Moore を慰めんとして、誕生日の贈り物にした詩だという<sup>(9)</sup>ので1947年11月15日の Moore の61歳の誕生日のためのものだったのだろう。熱い心の籠ったきらきら光る秀作である。

全篇367語から成る詩であるが、201語の異なった語（語彙）が使用され、先刻述べた反復句があるので、当然“please”（13回），“come”（15回），“flying”（13回）の3語が最も多く使われている。他には、これも当然予測されるように、不定冠詞“a”が10回、定冠詞“the”が25回、前置詞の“in”が7回、“of”が15回、“with”が11回、接続詞の“and”が11回使われているのが多い使用語である。以上、最も多く使われている7語だけで、総数367のうちの120となる。この詩で2回以上使用されている語は、201語のうち、上の7語も含めて38語だけで、163語はこの詩の中で1回しか使われない。ずいぶん語彙の豊富な詩であることが判る。同語の反復が少ない詩で、be 動詞でさえ、“is”が3回、“are”が4回使われるのみである。初出の際“blowing”は2回使用されていたが、そのうちの1回は、詩集収録の際に、新しい語の“resounding”へと推敲され、変更された。<sup>(10)</sup>如何に入念に吟味されている詩であることか。最も驚かされるのは、Bishop の『全詩集』115篇の詩作のうち、この一作の中でしか使われない語が53語もあるということであろう。“bearing”はこの詩の中で2度、“Brooklyn”は4度使われているが、他の114篇の作品の中では一度も使われていない。“epergnes”（枝状飾り皿）のような珍しい語や、“bon-mots”, “chemicals”, “abacus”, 或いは、“grandstand”, “jellies”, そして“uninvented”, “unnebulous”などならまだしも、“behave”, “blowing”, “broad”, “eager”, “facts”, “movies”, “musical”, “shopping”も、“follow”のような動詞でさえ、Bishop はこの作品の中だけで一度使ったきりである。Greenhalgh のコンコーダンスに依ればそうである。<sup>(11)</sup>“Public”も“Library”も、“shoe”も、この作品での一度きりの使用である。ついでに、53語のうちの残りも全て挙げておこう。accidents, bravely, capeful, censorious, comet, constantly, constructions, courteous, deplore, drums, dynasties, injustices, lions, malig-

nant, Manhattan, morals, mounting, museums, musk, negative, pellucid, pennants, priceless, resounding, sapphire, signaling, skyscraper, taxicabs, toe, verses, vocabularies。これらの語は、他の114篇の詩の中では使用されなかったのである。甚だ鋭敏潔癖な言語感覚であり、言葉を選びに選ぶ詩人だったことが判らう。

Bishop が115篇の詩の中で用いた語彙数は、Greenhalgh がその *Concordance* の巻末に付してくれた「語彙頻度表」によって計算すれば、<sup>(12)</sup> 5952語である。Bishop は、この5952の言葉を、115篇の詩で駆使したことになるが、その「語彙頻度表」を眺めていて気付くのは、冠詞、前置詞、接続詞、代名詞など、当然、使用度数の多くなる筈の語彙以外では、Bishop は余り、何度も繰り返しては同語を使っていないということである。“beautiful” のような形容詞も、9篇の作品の中で各々一回ずつ、計9回、彼女は使用しているだけである。入念な言葉選びをしているとは、「マリアン・ムーアさんへの招待状」だけではなく、全篇の詩作に当てはまることと言えようが、一篇の作品で使った201語の言葉のうち、53語が、その作品のためのみに使用されたこの詩は、やはり、Bishop の入念さを示す典型の一つと言えるだろう。

Bishop は Moore に初めて逢った時のことについて、自ら、「賞讃している人に会おうとしたのは、私の生涯でその時だけでした」と語っている。<sup>(13)</sup> Moore については、先刻の「思い出」だけではなく、他でも具体的に生き生きと Bishop は語っていて感銘深い。

Moore が W. C. Williams と合同で自作の詩朗読会を催した時のこと、それを聴きに行った Bishop は、早く着くつもりだったのに地下鉄を使用したら少し遅れてしまい、Moore の朗読は既に始まっていた。聴衆が少ししか居なかった前の方へそっと進んでいったら、彼女に気付いた Moore はうなづいて「こんばんわ」と言って、それから再び朗読に戻った。一、二カ月後、ある若い婦人が Williams からの手紙の写しを Bishop に送ってくれたが、それには「Moore は、Elizabeth Bishop という名の少女の世話をしていた。彼女は詩を書いているらしい」とあった。<sup>(14)</sup>

Moore は、「押韻はむさくるしい」とよく口にしたものだが、La Fontaine を翻訳していた間には、しばしば Bishop に、押韻の相談をしたし、Bishop の ballad の一篇を押韻が巧みだといって気に入ってくれた。Moore が何を気に入る、何を好まないかは、決して誰にも分らない、Moore はどちらかといえば天の邪鬼(contradictory)で、時々、非論理的なのです、などとも Bishop

は語っているが、<sup>(15)</sup>長年心から親炙した人にして初めて可能な愛情を沁み沁みと感じさせる発言である。

受けた当人でなくとも、身仕度もそこそこに思わず飛んでゆきたくくなるような魅力に溢れた詩の「招待状」が、凝った印象を余り暴わに与えないでいながら、その実、甚だ入念な細心の作品になったのも宜なるかな、である。Mooreが Bishop の「人生の進路を支配」した<sup>(16)</sup>人物であったように、「マリアン・ムーアさんへの招待状」は、Bishop の本質を象徴する作品であった。<sup>(17)</sup>

## 2. 光と影、空と海、そして家など

Bishop の使用した語彙から、彼女の世界の本質が窺えないだろうか。Concordance を眺めているだけでも気付くことの一つは、先刻も触れたように、不用意な言葉選びがさすがになさそうだということである。同語の使用が少ない。その彼女にしては偏愛した語といえるものが幾つかあるが、無論、使用頻度の多寡は、その語の、作者にとっての重要度とは比例しない。Bishop の場合、“sandpipers” (イソシギ) は、2篇の作品で一回ずつ、計2度しか使用されない語であるが、彼女には「イソシギ」“sandpiper”なる名作がある。<sup>(18)</sup>しかも、後年1976年に、「海外書籍部門ノインシュタット国際文学賞」を受賞してオクラホマ大学で行った受賞演説で、彼女は、自分は今までずっと、あのイソシギと全く同じように生き、且つ行動してきた、つまり、異なった国々の淵を<何かを探し求めながら>走り回ってきた、と語っている。<sup>(19)</sup>自分自身をイソシギに擬しているのである。イソシギは彼女自身なのだ。自分にとってそれ程重要な意味を有する語を、彼女は2度しか使わなかった。特別に重要な語だったからこそ、使用を惜んだのだ、とむしろ言うべきだろう。Bishop が2回しか使わなかった語は他にも多数あるが、それらの彼女にとっての重要度は、“sandpipers”とは比べものにならないのである。使用頻度わずか2回の“sandpipers”は Bishop にとって最も重要な語の一つである。その重要な語を使っている詩の一篇が、実は、「マリアン・ムーアさんへの招待状」で、「イソシギのように輝く文法」という眼の醒めるような輝かしい譬喩にして披露されている。あの詩が、Bishop の本質を象徴する一篇だと先刻述べた所以である。“sandpipers”のもう一回の使用例は「十二度目の朝、つまり、あなたの意志」“Twelfth Morning; or What You Will”で、「イソシギの悲痛な叫び」“the sandpipers' heart-broken cries”として使われている。尚、作品のタイトルに使われている語は、作品の中での使用例としては扱われないので、

「使用頻度数」には含まれていない。「イソシギ」と題する件の作品の中では、「イソシギ」なる語は全く姿を見せないのである。「彼」という代名詞が使われるだけで、誠に心憎い仕業というべきだろう。「招待状」が、1948年に、「イソシギ」が1962年に、「12度目の朝」が1964年に、それぞれ発表されており、先刻の受賞演説が1976年である。イソシギは30年間に亘って、Bishopの心の中に、見えつ隠れつ姿を現わし続けていたのだろう。

Greenhalgh の *Concordance* を「借りて」これからしばらく「相撲を取」らせてもらうことにする。Bishop の使用頻度の多い語に、水と海、及びそれに関する語がある。(以下、各語の後の括弧内の数字は、その使用度数を示し、2つ並んでいる場合は、初めのがその語の単数形、次のが複数形、の形で使用数である。)「水」water (61.4), 「海」sea (60.3) で、単数・複数形両方のいずれかが「水」は33篇の、「海」は30篇の作品に使用されている。使用度数だけでは、実はその語を多く使ったことには必ずしもならない。何故なら、既に見たように、「招待状」一篇の中だけで“please”は13回も使われているが、この語は他には、5篇の作中でそれぞれ一回ずつ、使われていて、総数18回は、6篇の作中での使用となる。“crumb”, “grandmother”, “almanac”などは7回使用されるが、それらはいずれも一篇の詩の中で使用されるだけで、他の114篇中には、一度も出て来ない語である。だから、33篇、30篇の作品に使用されるというのは、115篇の詩作中、3篇から4篇に一度の割合で作者の念頭に現われた語で、Bishop にとっては「偏愛」した語といってよいだろう。同じような語に「空」sky (36.5) がある。これも30篇の作品に出現する。「水」「海」「空」に関わりのある語を少しみてみよう。まず、「水」に関するもの。backwater(1), flush(1), flood(1), float (5・5), floating (10), rain (22・1)——「雨」は16篇の作品に出てくる——、ついでに「傘」umbrella (2・3), fog (7), mist (13), frost (4), snow (11・2) snowfall(1), dew (10), dewdrop (1), ice (7), iceberg (7・1) etc.

次に「海」に関するもの。tide (9・4), beach (7・4), ship (14・8) sailor (9・1), schooner (3), boat (6・5), harbor (5), etc. 尚、「水」と共通で sand (14)——10篇の作中で——, ripple (3・3), rippling (1), wave (8・10)——15篇の作中で——, waver (2), waving (2), etc. その他に「川」river (29・9)——10篇の作中で——, rivulets (2), brooks (1), waterfall (3・6), swim (3・1), swimming (6), 「池」

pond (3), pool (10・1), 「湖」lake (3・1) etc.

「空」に関するものでは、「雲」cloud (16・14) が22篇の作品に現われている他, star (11・9) etoile (1), heaven (8・5) ——11篇で——, rainbow (6・2) ——5篇で——, air (30) ——21篇で——, など。「煙」smoke (13) は8篇に現われる。因に、「陸」land (13) は7篇の詩に現われるが, earth (7), earthy (2), mud (7), muddy (2) など、「水」の関係よりは少ない。地上の〈場所〉を表わすものはやはりある。place (16・3), hill (20・9), mountain (2・5), mountaintop (1), ground (14), pasture (3・4), meadow (3・1), park (4), square (8・2), scene (6・4), island (9・9), peninsulas (1), promontory (1), flat (11・1) など。town (8・1), city (6・2) に比べて, country (8・1) は、「田舎」ばかりを指すものではなく, hamlet も village も使用されていないので, 「都会」のほうが, Bishop にあっては優勢か。road (6・2), street (7・3) と, こう見てくるとやはり, 名作「地図」“The Map”の作者らしく, 地図や地勢に関心を抱き続け, 海や空を旅して回った逍遙詩人らしさが,<sup>(20)</sup> 語彙の使用状況からも窺えるといつてよかろう。と同時に, 光と影の詩人ではなかったかとも思われる。light (45・11) は, 単数形のうちの40回が「光」の意味で使われていて, 複数形の「光」も含めて, 37篇の作品に「光」は出現する。

光に関する語をみてみよう。lighting (1), lightning (3・1), flash-light (1), 「ぴかっと光る」flash (4・2), 「ぎらぎら光る」glare (5・2), 「ぴかりとする」glint (2) は, 動詞形も名詞形もある語だが, flashed (1), flashier (1), flashiness (1), flashing (2), glinted (1), glinting (3), その他 gleams (2), glistening (4), glistened (2), glisters (1), glitter (1・1), glittered (1), glittering (6), glow (3), glowing (1), glazed (4), glazes (1), gold (13), golden (8), silver (19), 或いは, lamp (4・2), lamplight (1) とあり, 光は豊富である。それに対して「影」のほうも, shade (5・1), shady (1), shadow (7・10) とある。それに, 「太陽」sun (33) と「月」moon (26・4) が, 目立つ頻度数である。「太陽」は24篇の作中に現われ, sunlight (2), sunrise (3), sunset (2), sunshine (1) などを含めれば, これらのいずれかは27篇の作中に出てくる。「月」のほうは, 19篇に, moonbursts (1), moonlight (7), moonlit (3), moony (1), など, これらのいずれかが出ている作品は24篇である。自然界の「光」の代表者である「太陽」と「月」関係の以上の語が, 少なくとも一度は現われる詩だけ

でも45篇に及ぶことが判る。「光」のイメージは、殆どどの作品に何らかの形で現われているようだ。「光」が現われるということは、「影」を表わすイメージが明らさまに存在しなくとも、自ずから背後に「影」は附随して暗示されるということで、光と影の詩人と先刻述べた所以である。

眼だの手足だの腰だの、身体（動物のも含めて）の部分を表わす語は、我々に身近かで親しく、諺などにも、多様に使われているものであるから、詩作の際にも一般的に言って多く使用される語である。Bishop の場合にも、毛髪 hair から爪先 toe まで、身体関係の語は、使用されている。hair (11・3), head (30・10), forehead (2), eye (17・66), [eyed (3)], nose (4), nostrils (2), mouth (9・4), lip (2・4), cheek (1), ear (3・8), face (16・11・), throat (4・2), neck (3・4), shoulder (2・1), arm (3・6), hand (12・14), finger (2・4), thumb (2・1), chests (2), breast (6・4), nipple (1), heart (22・2), waist (1), leg (3・4), knee (3・4), heels (1), toe (1・4), limb (2・4), nails (3), と上方から下方へ並べられよう。back (53・2) と foot (6・31) とは、それぞれ、後に (へ・の) という副詞 (形容詞) の意味、及び、長さの単位フィートを含んでいる数字で、「背中」、「足」という身体の部分の名称としては、それ程多くない。以上から判るのは、「眼」eye が圧倒的に多数使用されていることである。単数形が出てくる作品には複数形は出て来ないことが多いが、少なくともそのいずれかが出現する詩は52篇に及んでいる。イメージ (心象、眼や心に浮ぶ像・姿) の鮮烈な詩人である Bishop らしいと言えよう。

「耳」ear が語として作中に現われるのが少ないからと言っても、Bishop が、聴覚よりは視覚の優勢な詩人だなどということにはならない。彼女は12、3歳の頃、Hopkins の詩の不完全な断片の一つで、“tattered-tasseled-tangled” (ぼろぼろの房になって纏れ絡まった) という語句の入っている詩行に大変感動したというし、<sup>(21)</sup> また、無断で Moore に使われてしまったと恨みめかして「思い出」の中で語っている一句 “the bellboy with the buoy-balls” は、自ら不意に思い付いて、「その響きの故に」大変気に入って、Moore に得意になって何度も繰り返して告げたものだという。<sup>(22)</sup> 後刻触れる作品「雄鶏たち」の中には、第22連に “a first flame-feather” なる句もあるように、彼女は頭韻を著しく愛用したし、「雄鶏たち」は、微妙な音の変化が全体を支配している作品である。Bishop は、甚だ鋭敏繊細な音感の所有者だった。視覚聴覚共に、秀れた芸術家らしく、鋭かった。

1956年9月15日号の *New Yorker* に発表した作品 “Sestina” は、最初の行 (September rain falls on the house.) と最後の行 (and the child draws another inscrutable house.) が、「家」house で終わっていた。この詩は、「家」で始まり「家」で終る作品で、Bishop にとって「家」は大切なイメージであると、私は既に指摘したが、<sup>(23)</sup> house (49・12) は目立つ多用語で、28篇の作品中に出てくる語であり、home (25) か house のいずれかが出現する作品は36篇に及ぶ。3篇強に一篇の割である。lighthouse (4), fishhouses (2), warehouses (1), schoolhouse (1), crypto-dream house (1), proto-dream-house (1), farmhouses (1), henhouse (1), と house の付く語がある。その他、「家」に関係のある語としては、room (12・5)——10篇の作中で——, roof (4・2), window (13・4), wall (8・10), walled (1), wallpaper (6), fence (8・3) などがあり、bed (14・8), lullaby 「子守歌」 (5)——一篇の作中でだけではあるが——, が気になる語である。先刻、「海」に関して挙げた harbor 「港」も、「家」と関連づけられもしよう。ブラジルに18年間 (1953年～71年) 住んでいた<sup>(24)</sup>間もアマゾンの奥地を訪ねたりしたというし、絶えず旅をしていた彼女の逍遙は、実は、本当の「家」を、home を、求めてのものだったのではあるまいか。彼女の作品世界共々、house や home の使用度数は、私にそう感じさせるのである。

Moore ほどではないにせよ、Bishop にも動物を標題にした作品が、先刻触れた “Sandpiper” や、後刻取り上げる “Roosters” の他にも、“The Fish”, “The Armadillo”, “The Moose”, “Pink Dog” などと幾篇もある。彼女の作品に登場する動物、あるいは植物には、どのようなものがあるのかも、*Concordance* から抽出して表を作成してみたが、詳しくは、ここでは割愛する。しかしそれから判ることを若干記しておこう。動物を表わす語彙は100を優に越えてやはりなかなか豊富であるが、Moore には当然のように見られる、elephant, giraffe, tiger, などは Bishop の世界には現われない。まして pangolin (後に触れる) などは言うに及ばないことで、彼女の言葉選びは、この分野でも慎しく潔癖で、奇抜なものは現われない。zebus (こぶ牛) が殆ど唯一の例外とでも言うべきか、一度出てくる。dog (14・3)——9作品に——のほうが cat (4)——3作品に——より優勢であり、horse (10・1)——8作品に——のほうが cow (3・5)——5作品に——よりやや多い。alligator (1), crocodiles (1), turtle (1・6)——3作品に——はあるが、陸亀の tortoise は出てこない。donkey (1・2) はあっても mule はない。fireflies (5)——4作品に、goat



(5・7)——3作品に, gull (4・3)——3作品に, owl (3・4)——4作品に, snail (6)——5作品に, 辺りが目立つところ。最も多く使用されるのは, 一般的な fish (23)——16篇に——と bird (17・23)——26篇に——である。魚は「水」中に, 鳥は「空」中に棲息する動物であり, 「魚」と題する作品, 「イソギ」と題する詩があること, 先刻の「空」と「水」が多かったこと, などと関連して面白い。

植物もなかなか豊富に出てくるが, 「薔薇」rose (3・9) が10篇の作品に出てきて一番多い。変わったところでは bluet (トキワナズナ), foxgloves (ジキタリス), vetch (カラスノエンドウ), hackmatack (アメリカカラマツ) 辺りで, それぞれ一回ずつ登場している。植物の場合も, 一般的な tree (13・19) が, 25篇の中に出てくるのは, 如何にも Bishopらしいところだろう。“To a Tree” 「木に寄せる」と題する高校生時代 (1927年発表) の作品があるが, 特殊で奇抜な名の本を持ち出さないところ, 動物の場合と同じである。

Moore が大変愛用したせいでもあるまいが, hat (18・1) が18篇の詩<sup>(25)</sup>の中に現われ, つばの反った中折れ帽 fedora も一度使われているのが目立つところである。固有名詞では, Baudelaire は出てきても, それとの連想から Verlaine, Rimbaud, Mallarmé, Valéry などは使われず, Socrates は出てきても plato は出て来ないし, Newton, Pascal, Raphael は出て来るが, 彼らの周辺のすぐ我々の脳裡に浮かぶ他の科学者, 哲学者, 画家は, どこにも現われない。そういう安直な語選びを, 彼女は決してしない詩人だということが, Bishop が作中に持ち出す固有名詞を見ても十分に窺えるのである。

### 3. 「雄鶏」とムーアの「センザンコウ」

Bishop の “Roosters” と Moore の “The Pangolin” との比較が興味深いと注意を促したのは Anne Stevenson であるが<sup>(26)</sup>, 彼女のその示唆を正面から受けとめてみることにしよう。まず, この二作品を, それぞれ全訳で示すことにする (原詩は注の最後に付す)。“Roosters” は3行の詩節が44連から成る長篇の力作で, *New Republic*, 104 (April 21, 1941) に発表された<sup>(27)</sup>。Bishop が「その時まで試みた最も意欲に充ちた長詩」<sup>(28)</sup>であると共に, 彼女の最上の詩の一篇である。左端に, 原詩にはない連の番号を, 便宜上付しておく。

## 雄鶏たち

- 1) 四時に  
砲金紺色の暗がりの中で  
私たちは最初の雄鶏の最初のときを聞く
- 2) 砲金紺色の窓の  
真下に  
すると直ちに こたまが返る
- 3) 離れた遠方に、  
それから 裏庭の囲いから一声、  
また一声、ぞっとするようなしつこさで、
- 4) ブロッコリー畑から  
湿ったマッチをこするような軋み音が立ち、  
ぱっと拡がる、そして町ぢゅうに感染しはじめる。
- 5) 叫び声のごっそり  
水洗便所の扉からやってくる、  
糞べったりの鶏舎の床から、
- 6) その青い汚れの中では  
彼らの妻たちがかきこそ音立てながら賞讃し、  
雄鶏たちはその無慈悲な足をふんばり ぎらぎらと見詰める
- 7) 愚かしい眼で  
そうしている間も 彼らの嘴からは上るのだ  
抑制されない従来のままの叫び声が。
- 8) 突き出した胸の奥深くから  
緑金のメダルでお洒落して  
他の者たちを指揮し恐れさせようとする、
- 9) 言い寄られ蔑られる  
雌鶏の生活を送る  
多くの妻たちを、

- 10) ひりひり痛む喉の奥深くから  
無意味な命令が漂い広がる  
町ぢゅうへ。一羽の雄鶏が小気味よさそうに
- 11) 私たちのベッドを眺める  
錆ついた鉄の小屋や  
古びた寝台の床架で出来た囲いから
- 12) 私たちの教会を、  
そこにはブリキの雄鶏が止っている  
私たちの小さな木造の北寄りの家を越えて、
- 13) 出撃する  
泥だらけの小路小路から  
ランド・マクナリーのような地図を区画しながら、
- 14) 頭がガラスのピン  
油山吹色に 青竹色  
無煙藍色、アリザリン色、
- 15) 各々が 意欲に充ちた  
追い出した 釣り合いを保った状態の。  
各々が金切り声を立てている、「ここは俺さまの住む所だぞ！」と。
- 16) 各々が金切り声を立てている  
「起きろ、夢を見るのはやめい！」と。  
雄鶏たちよ、君らは何を目論んでいるのか。
- 17) 君、ギリシャ人が柱の上ののせて  
射つ対象に選んだものよ、生け贄にされる時  
じたばた腕くものよ、彼らが札を
- 18) 「甚だ戦さ好き…」と貼った君よ  
如何なる権利をもって君は命令を  
下し、私たちに生き方を教えるのか、

- 19) 「そら!」, 「そら!」と叫び  
愛も自負も戦争も望まれていない  
所にこうしている私たちの目を覚まさせるのか。
- 20) 君の小さな頭に乗っている  
赤いとさかには  
闘争のための血が全て漲っているのだ。
- 21) そうだ、あの突出物は  
非常に雄々しい存在になっているのだ。  
あの虹色の俗悪な美である他に。
- 22) 今や 中空で  
二羽ずつ彼らは互いに闘う。  
下へと最初の燃えるような羽が降りてくる、
- 23) すると一羽は翔んでいる  
並みはずれて壮烈に  
死の感情すらものともせず。
- 24) そして一羽は 落ちてしまった、  
しかしそれでも町の上を  
彼の引き抜かれ血まみれになった羽々は漂い降りる。
- 25) そして彼が歌ったことは  
どうでもよくなる。彼は投げ飛ばされてしまう  
灰色の灰だまりの上に、糞の中に横たわる
- 26) 死んだ己が妻たちと共に  
血ばしった眼を開けて、  
そうこうしているうちに 金属のような羽は酸化する。
- 27) 聖ペテロの罪は  
マグダラのマリアのよりはもっと悪かった  
彼女の罪は肉体だけのものだったのだから、

- 28) 精神のだったから ベテロの罪は  
落ちてゆくのだ、燃えさかる炎の下を、  
「僕たちと役人たち」の間を。
- 29) 昔の聖なる彫刻は  
それを全て一緒に一まとめに出来たのだ  
一つの小さな場景の中に、過去も未来も、
- 30) キリストは愕然として立ち、  
ベテロは、二本の指を挙げている  
驚いたような昏に、二人ともまるで呆然としているみたい。
- 31) しかし その二人の間に  
一羽の小さな雄鶏の姿が見える  
石灰華のくすんだ円柱の上に刻まれて、
- 32) その下に オンドリ ガ トキヲ ツクル、  
ベテロ ガ ナク と説明されて。  
ここに 必然的な希望がある、肝心かなめだ、
- 33) そうだ、そしてベテロの涙は  
私たちのシャンティクレア<sup>(29)</sup>の両脇腹を  
流れ下って その蹴爪を宝石のように飾る。
- 34) 涙をびっしり鑲められて  
中世の遺品のように  
彼は待つ。哀れにもベテロは、悲嘆にくれて、
- 35) やはり信じられないのだ  
あのコケッコーはそれでも神を崇めているのかも知れないとは、  
彼の恐しい雄鶏は赦しを意味することになるのかも知れないとは、
- 36) パシリカ聖堂<sup>(30)</sup>と家畜小屋の上の  
新しい風見鶏は、  
それにまた、ラテラノ聖堂<sup>(31)</sup>の外側には

- 37) 常に斑岩の柱の上に  
ブロンズの雄鶏がいたのだから  
人々と法王とは
- 38) 「十二使徒の王子」<sup>(82)</sup>でさえ  
ずっと以前に赦されていたのだと分っていたかも知れないと  
言おうとしているのだとは、また、全ての集會に
- 39) 「そうではない ではない ではない」と  
雄鶏たちの全てが叫んでいるわけではないのだと  
納得させようとしているのかも知れないなどとは。
- 40) 朝になり  
弱い光が漂っている  
裏庭に、そして金色に染めている
- 41) 下から  
ブロッコリーを、一葉一葉。  
どうして夜は 滅びてしまえたのだろうか、
- 42) 小さく浮かんでいる  
ツバメの腹部と  
空中の桃色の雲の縞とを金色に染めながら、
- 43) 一日の前触れを  
大理石の中のとりとめもない縞のようにしたまま。  
雄鶏たちはもう殆ど 聞こえなくなっている。
- 44) 太陽が登ってくる、  
「最後を見んとし」たあと、  
敵か友人のように忠実に。

早朝、一羽の雄鶏が突然ときを作る。それを合図のようにして、次々と町中の雄鶏が叫びを挙げる。それを耳にしながら、詩人の夢想が展開されるのだ。この詩では、人生と芸術との関係、人生と芸術及びその他の、美なる語でこの

詩人が差すものとの関係に対する作者自身の感情が、この詩を秀作にした特質——アイロニーと穏やかさとの奇妙な組み合わせ——によって示唆されている、と件の Stevenson は言う<sup>(33)</sup>。彼女の見解を今少し聞こう。

明らかな次元では、この詩は、芸術と宗教との美及び統合を、実人生の恐怖と対比したもので、「湿ったマッチ」のように朝を軋ませる雄鶏のしわがれた叫び声は、雄鶏のみならず人間の生活の愚かしさと無益さを象徴していると見られる。「ここに俺がいるぞ」と叫ぶ雄鶏は、残酷で尊大な人間性の象徴であるが、第22連から、戦いが現われると共に、雄鶏は鶏舎からキリスト教芸術の寓話へと転換される。

一羽の雄鶏の死は、ペテロがキリストを拒んだことを想起させ、キリストの赦しのイメージが喚起されるに至る。人類は救済を考えることが出来るから、結局、人類は雄鶏ではないのだ、となって、この詩は、希望の宣言になる。雄鶏は人間のための赦しのつもりでやってきたのだ（第35連）、となって、信仰の、よりよい生活の、可能性が生じるわけだ。

雄鶏はまず、悪の象徴として現われ、次に善の象徴となり、日の出を伴う象徴として、消え去ってゆく。「敵か友人かのように忠実に」という太陽は、全ての象徴が有する曖昧さを、結局象徴するものだ、と鋭い指摘をした Stevenson は、「朝の束の間の美しさは結局は埋め合わせにすぎず、この世の人間によって生ずる悪からの人工の逃避にすぎない芸術とはちがって、何物をも赦さず、我々に何も告げず、何の説明もせず、ただ、それそのものなのだ」と、この詩の解釈を結ぶが、深い読みと言うべきだろう。「金色に染める」“gilding”の繰り返し（第40、42連）や、ツバメとブロッコリーが日光の中で同じように美しく描かれるなど、最後の五連で、何でもないありふれた風景の美しさが美事に描出されるので、その十全の意味を見落しそうだ、と Stevenson は言うが、彼女のように、「美は善悪同様、人間の創り出したものだということを、この詩は何と巧みに示唆していることか」と感取するのも、確かにその十全の意味の一つを汲み取ったことになるのだろう。

Stevenson の指摘で、特に注目したいのは、Marianne Moore なら、この詩を、絶望を拒否するところで、つまり、「そうではない、ではない、ではない、と雄鶏の全てが叫んでいるわけではない」という勇敢な肯定で終らせていたかも知れないのに Bishop にとっては、信仰や芸術の総合は決して永続するものでも安定したものでもないもので、結局、Bishop は、日の出と共に美しくなってもはや醜くもいやらしくもない現実世界へと戻っていくのだ、という簡

所である。(35) この二人の詩人の質をよく見抜いている見解と言うべきだろう。“The Pangolin”「センザンコウ」を見てみなくてはならない。

「センザンコウ」とは、有鱗目センザンコウ属の身体を守る堅い鱗のある動物の総称で、オナガセンザンコウ、インドセンザンコウなどがあり、蟻を主食とする。だから「有鱗蟻食い」“scaly anteater”ともいう。名称の“Pangolin”はマレイ語が語源で、丸くなるもの、という意で、驚いた時に身体を丸くする習性に由来する。Mooreは大の動物好きで、彼女の全詩集 *The Complete Poems of Marianne Moore* に収録されている125篇の作品中、動物がタイトルになっているものは26篇もあり、猿や象、キリン、蛇、蝸牛、蛸、ライオン、虎、など、ありふれたものは無論、トビネズミ“The Jerboa”、セビレトカゲ“The Plumet Basilisk”、軍艦ペリカン“The Frigate Pelican”、オオムガイ(36)“The Paper Nautilus”など、ずい分特殊な動物が題材にされている。それにしても、センザンコウ、とは奇妙な動物を取り上げたものである。Mooreの最も内気で自己防禦をする動物の一つだ。(37) 作中で詳細に言及、描写されるこの動物の特徴や生態などは、二冊の博物誌によっている旨の自注がある。詩集 *The Pangolin and Other Verses* (1936) に収録された。(38)

### センザンコウ

もう一つの装甲動物——鱗

エゾマツの松毬の規則正しさに重なり合っている鱗 それらは  
途切れることなく中央の尾の列を

成すに至る。／ 頭と脚と、砂粒を備えつけた砂囊とを持つこのチョウセンアザミに  
夜の小型芸術家技師は、 近いもの、

そうだ、レオナルド・ダ・ヴィンチの生き写しだ——

我々がめったに噂を聞くこともない感銘深い動物にして勤勉家。

武装は余分にみえる。だが 彼にとっては

閉ざしている耳の敵——

あるいはこの小さな隆起さえ隠している

暴わな耳と 同じように安全のために

収縮する鼻 及び貫き通せないように閉ざせる

眼の孔は、そうではない。——本物の蟻食いで、  
ゴキブリ食いではない、彼は夜中に

不慣れた土地を精根枯らすほど孤りで旅することにも堪えて



日の出前に戻ってくる。月光の中に歩み入り  
 奇妙にも月光の上を歩いて両手の  
 外側の縁で体重を支えて釣爪を守って  
 廻るのに備える。木の回りを  
 蛇行して、彼は引き上げてゆく  
 けんかを好まずに危険から、  
 無害なシューという音しか立てずに。保つわけだ

ウェストミンスター寺院の錬鉄の蔓草

あのライトン・バザードのトマス<sup>(39)</sup>の脆い優雅を、でなければ  
 丸まって球となり それを解き広げようとする  
 あらゆる骨折りをも斥ける力を示す。強力に尾を中に入れ、端正な  
 頭は中心へ、折れないようにと首の上に、両足は丸く縮めて。  
 それでも尚 彼は刺されることを防ぐ鱗をもつ。更に内側から  
 土で閉じた岩の巢も、それを彼はこれほどまでに暗くできるのだ。  
 太陽と月と昼と夜と人間と獣  
 各々が光輝に充ちている  
 それはどれほど下劣な人間でも斥ける  
 わけにはゆかぬもの。各々が素晴らしいのだ!

「恐しがるが恐れられる」、この武装した

蟻食いはサスライアリに出逢っても引き返したりはせずに、  
 可能な限りの量を呑み込む、尾の上の平たくなった刃の縁の  
 葉状尖端針やチョウセンアザミの植った脚や胴の薄層は  
 報復されてうようよと攀じ登られる時には、  
 激しく震わせるが。ガルガロ<sup>(40)</sup>の主役闘牛士らしい  
 窪んだ鉄のような頭の帽子のつばの上の畳まれた縁付き装飾り  
 のように目の詰んだ彼は、落下してから  
 歩き去る  
 無傷のまま、尤も 邪魔されなければ  
 彼は用心深く木を伝い降りてゆく、自分の

尾に助けられて。巨大センザンコウの

尾は、優美な道具で、支えや手や箒や斧として、特別の  
 肌をした象の鼻のようにひっくり返るのだが、

見失われることはない、この蟻や石を呑み込む、損われることのない  
 チョウセンアザミの上でも、それを阿呆どもは生きている寓話で  
 石が滋養物になるものと思っていたのだが、実際は蟻が  
 そうなっていたのだ。センザンコウは攻撃を好む動物ではない、  
 たそがれ時と日中との間は彼らは鎖とは見えないような機械じみた形体は  
 とらず、災難や転換によって優美に  
 された物がよくやる摩擦のない腹

這い歩きをする。優雅を説明するには必要なのだ

好奇心の強い手が。いやしくも存在するものは永続するものでないとすれば、  
 何故、小尖塔を動物で優雅に飾って  
 その 冷い豪華な低い石の座席に  
 群がって休息する人々——修導士に修導士に修導士——が これほどに  
 創意工夫に富んだ屋根支柱の間に、奴隷のようにあくせくした挙句  
 優雅を混同してしまったのだろうか、一つの親切な態度と、借金を払う時と、  
 罪の救済と、垂直面を越えて  
 広がってゆく石造の  
 丸窓放射状仕切りだとまだ認められているものを  
 優美に使うことと。帆船は

最初の機械だった。センザンコウも、静かに

動いてゆくようにされた四つ足の  
 精密な模範なのだ。後ろ足は蹠行性で  
 人間の姿勢も幾らかはとれる。太陽と月の下に、人間は奴隷のようにあくせくして  
 己が生活をもっと甘美にしようとして、花々の半ばは持つに値する状態を保ち、  
 己の力の使い方を賢明に選ばねばならぬ。  
 スズメ蜂のような製紙業者か、食料品のトラクターか、  
 蟻のような、あるいは流れの上の  
 茂みから或る長さの網を  
 蜘蛛のように張るか、聞いながらセンザンコウの  
 ように熟練工となって、ひっくり返るか、

落胆の余り。ごてごて飾り立てられるか、まっ

裸で、人間は、自我は、我々が人間と呼ぶ存在は、この  
 世にとっての習字教師は、グリフィン<sup>(42)</sup>と化すのだ、意味の暗い

「同類は非難に値する同類を好まない」を。そして誤りを書く、四つの  
 アールで<sup>(42)</sup>。動物たちの中で 一つはユーモア感覚を持っている。

ユーモアは2、3歩節約してくれる。それは幾年も節約してくれる。無知では  
 慎しやかで感情に走らず、それでいてあらゆる感情をもって なく、  
 彼は尽きることのない活力を、  
 成長する力を持っている、  
 尤も 人の呼吸を早めたり勃起させたり  
 できる生き物は殆どいないけれども。

何ものをも恐れることのない彼だが、

それなのに震え上って、足どりは一步ごとに障害に逢うように  
 あちこちへ歩く。定則と

矛盾せず——温血で、鬚はなく、二対の手と若干の毛——即ち

哺乳動物である、そこに 自分自身の生息地に 居すわって

サージで覆われ、強力に装飾されている。恐怖の虜となって、彼は、常に  
 権利を縮小され、生命を消され、薄暗がりには邪魔され、仕事も一部しか果さ  
 交替する相手の炎に向かって言うのだ、 げ

「再び太陽を！」

毎日毎日を新たに、新しく新しく新しく、

中に入ってきて私の魂を落ち着かせてくれる日々を」と。

Moore がしばしば行なったように、この詩も、文字の組み方が重要な特色の一つで、各行の行頭の出入りが成す一連及び九連全体が形造る視覚上の映像は、センザンコウの形姿のある特色でも暗示するのかも知れない。作品全体の中の真中、第5連のみが10行で、他の連より1行、詩行が少なく、いわば洞がくびれている。これはセンザンコウの姿とは異なるようだ。合計98行の詩である。Bishop は Moore から色々多く学ぶところがあつた筈であり、現に、Bishop の作品が初めて単行本の詩華集に載つた際の“mentor”（指導者）の役は、Moore に努めてもらったし、<sup>(43)</sup> 既に、また、後刻も触れるように、Bishop は具体的に作品を Moore に見てもらつては助言を得ていたのだが、作品の文字面の視覚上の効果という点では、彼女は、この敬服している先達を殆ど踏襲しなかつた。いわゆる“enjambment”（句・行跨がり）では、Bishop も名手の一人だつた<sup>(44)</sup>かもしれないが、Moore の奔放自在さ・華麗さには、遠く及ばないだろう。Bishop の関心は、そこにはなかつた。Moore のこの詩

では、末尾に不定冠詞が来るような語の配列すらなされている。

この詩、いきなり、「もう一つの」武装した動物、と始まる。無論、作者の念頭には、既に、武装動物が一つ在るわけだ。人間という、その発生以来さまざまな武具を工案し、使い続けてきた動物である。この詩は、Hadasを待つまでもなく、「センザンコウの特殊な習性とその個としての優美さについてのものであると共に、人間の状況についてのもの」<sup>(45)</sup>なのである。この詩には、Bonnie Costelloの詳細な解釈・見解があるので、それを少し、見てみたい。彼女は、この詩を、闘争の譬喩を使った詩の中でも最も包括的な作品だ、と言う。心の過程を記録しながら、その漠然たる類推の中へ多くの主題とイメージを引き入れ、こうして Moore は、形体の転換と機能の災難との間の対応を手に入れるために「優美」「grace」という概念を持ち出すのだ<sup>(46)</sup>と。形が変われば機能も損われる、ということを行うために「優美」を問題にするのだ、というわけである。その通りであろう。

更に Costello は言う。Moore はこの詩で、センザンコウの武装をそれが役立つことと美しいこととで賞讃するので、この詩の言語は、この二つの面の間を、時にはその有用性に、時にはこの防禦覆いの優雅さに注意しながら動いている。この詩の仕事は、その二つの結合を発見することであり、Moore はそれを、共時的な（静止した体系としての）構造と、通時的な（動的状態としての）構造との、どのような相互作用の中にも見出ししている、<sup>(47)</sup> というのは秀れた見解であろう。人間の好戦性が、この詩では言及されるわけだが、センザンコウと人間を対比することで、この詩は、他の幾つもの対立関係——記号と意味、主題（主観）と目的（客観）、観察者である作者と彼女の注目する対象、等——に直面するのだ。<sup>(48)</sup> この詩は、類推・連想によって展開されてゆくが、「単純な比較の原理は使われず」<sup>(49)</sup>、連想の繋ぎは多様で、聴覚によるもの、視覚に依存するもの、概念上のものなど種々のものが、センザンコウの鱗のように重なり合うところに、この詩の喜びがある、<sup>(50)</sup> というのもその通りである。センザンコウは、いつの間にか教会へと連想が移り、詩の優雅が暗示され、建築の優雅と対比され、<sup>(51)</sup> 人間とその闘争に及び、<sup>(52)</sup> 「これまで結合されたことのないイメージの氾濫」と共に、感嘆の言語で始まったこの詩は、<sup>(53)</sup> 感嘆の言語で閉ざされていて [感嘆符が、書き出しのところで最後の箇処に用いられていることを指す] 一種の円弧を描いて [これは、センザンコウの形姿の象徴でもあって美事な指摘である] おり、<sup>(54)</sup> この詩は「入念な変装構造をもった長い迂遠な詩」であり「防護器管（武装）と優美についての詩」<sup>(55)</sup> である、

と以上が、Costello の、この詩についての見解である。

センザンコウは、言うまでもなく Moore の詩では寓意のある動物で、「人間の勇気、ユーモア、親切、優雅などの象徴である」<sup>(56)</sup>。Moore もこの詩を、日の出のイメージで結んでいるが、ここの太陽は、Bishop の「雄鶏」のような、敵もしくは味方というような「曖昧な象徴ではなく、明らかな人間の勝利の高らかな象徴」であり、「この太陽はセンザンコウの信仰を復活させる」<sup>(57)</sup>ものであった。「雄鶏」の中での太陽のように「最後を見ようとして」昇ってくるのではないのだから。

「最後を見ようとして」については、作者自身の言葉がある。Bishop は“Roosters”を書き上げるとすぐ Moore に送ってみてもらった。Moore は、母親と共に夜おそくまでかかってその詩に手を入れて、返送してくれた。<sup>(58)</sup>それは“The Cock”と改題されてもいた。それに対して Bishop は Moore に 1940年10月17日付きで、手紙を書いている。<sup>(59)</sup> Moore は幾つもの修正や示唆をしたようだが、Bishop はそれらの幾つかには従って、ある連から「私」「I”なる語を削除したりしたが、自説もしっかり押し通した。Moore は、あの厳格な三行連をばらばらにし、押韻の詩も崩していたが、Bishop は詩節と脚韻にも頑固に固執し、標題も、Moore の変更したような古典的な語より、むしろ蔑った語である“roosters”を用いたいが、それは、ピカソが「ゲルニカ」で行なったような暴力的な雄鶏を念頭においたからと述べて、原題のままとした。Moore は韻律についても何か言っただろう。Bishop は、私はガタガタする韻律“rattle-trap rhythm”のほうがむしろ適切だと思うと述べているし、第五連の「便所」なる語の使用などを「叱った」のに対しても、軍国主義の本質的な卑しさを強調したいからと述べて、他の「汚い語句」共々、保存した。

Moore は第11連に、“our beds”ではなく、“fastidious beds”を、第12連には“tin rooster”ではなく“gold rooster”を、と示唆したらしいことが、この手紙で分るが、Bishop は、いずれも自分の考えを保持した。書き出しの所の「砲金“gun-metal”の繰返しと共に「最後を見る」もやめるようにという示唆もされたらしいが、これも原作を護ったことが、やはり手紙の文言で判る。「最後を見んとして」の引用を保持したいのは、「聖書の中でペテロに関して用いられている表現は、極度に痛烈だと常々自分は感じてきたからだ」と述べている。後年、書誌の編者 MacMahon 宛ての1977年8月12日付きのハガキで Bishop は、その出典は King James 版聖書のマタイ伝第24章58節だと述べたと言う。<sup>(60)</sup>第14連の「頭がガラスのピン」については、雄鶏があちこちで

鳴いている様は、地図の上で戦争計画を示すピンのように感じたからだ、とも説明している。作中の「ランド・マクナリーの地図」云々の譬喩共々、如何にも、名作「地図」“The Map”<sup>(61)</sup>の作者らしい感じ方である。

「雄鶏」と「センザンコウ」とは、共に最後に、昇ってくる太陽が喚起されるだけでなく、途中で、「戦い」と「教会」へ想いが移って、結局は人間が考察されようとする。視覚上の効果のせいもあり、凝縮されたイメージの豊富さも与って「センザンコウ」のほうが華麗な作品であるが、内容の深さの点では「雄鶏」のほうが勝るように思われるが、如何であろうか。Jerome Mazzaro も言うように、<sup>(62)</sup>この詩は、夜明け前の「最初の雄鶏の最初のトキの声」から、雄鶏たちの声を「殆ど聞えなく」する太陽の出現までを、規則正しい3行連の計132行かけて動いてゆくが、夜の終りを告げる雄鶏の叫びは、まず雌鶏を、それから眠っている妻たちの心を動かし、人間の歴史へ働きかけ、墮落と贖罪の象徴となって、太陽に道をゆずるに至る。

この詩、見られる通り規則正しい3行連であるが、およそ単調ではなく、展開されるイメージと韻律は、慎しやかにではあるが巧妙に変化されている。その有り様を、Anne R. Newman は作品を逐一解釈しながら明らかにしてくれる。<sup>(63)</sup>

Bishop は、新聞に載ったピカソの雄鶏の複製に触発されて、この作品を書き始めたが、スカララッティのあるソナタを聞くまでは難渋した。それが示すように、Bishop が強い関心を抱き続けた絵と音楽が、共にこの詩に直接の効果を及ぼしており、視覚と韻律の効果が極度に結合した詩が、この作品で、彼女の芸術の力によって、裏庭のしわがれ声の雄鶏は、希望の象徴になった。確かに、雄鶏という現実の存在が徐々に変容されて、ペテロがキリストを拒んだという象徴的な挿話へ移行してゆき、しかも、それを自然というもっと大きなサイクルの中に包みこむ、<sup>(64)</sup>などという芸当は、並み大抵ではない。Bishop はこうして「現実と理想」「永遠と崩壊」「人間と自然に対する肯定と拒否」を、我々にも見せてくれる。

普通の、予想されるような柔らかな青ではなく、「砲金紺色」で始まったが、これは以後現われる色、「緑金」「油山吹色」「青竹色」「無煙炭藍色」「アリザリン色」共々、この詩の金属感を支え、色と金属を結合するイメージが、使われる。硬い金属感の色彩が、つらい無感覚の目醒めと調和しているし、「糞べったりの鶏舎の床」「錆ついた鉄の小屋」「古びた寝台の庄架で出来た囲い」「頭がガラスのピン」などのイメージが、冷たい、心ない野蓄さと腐朽の印象

を増すのに役立っている。こういう視覚上の感覚は、雄鶏を示す他の形容、「愚かしい眼」「突き出した胸」「ひりひり痛む喉」及び、雄鶏の行動を示す語、「きしみ音を立てる」「ぼっと広がる」「ふんばる」「指揮する」「小気味よさそうに眺める」などによって強烈に支えられているし、これらの背後に、強さと軋みを増してゆく音のイメージ、「最初のトキ」「こだま」「ぞっとするようなしつこい叫び」等々があって遂に「金切り声」に至る。これらは韻律上のぎくしゃくした効果で支えられる。11～16連は、韻律が、雄鶏の叫びのスタッカートを帯び、ここの全ては、夜明け前の時間の嫌な印象を展開するのに資している<sup>(65)</sup>。最後の5連では「1」の頭韻が目立ち、始めの部分のぎすぎすした子韻に取って替り、母韻も幾らか軽く素早く動き、前より規則正しいリズムになるにつれて「スプラング・リズム」の効果は下がってくる。言語そのものが、夜明けと共に変貌しているように見える<sup>(66)</sup>、などとすれば、これはもう翻訳では、この詩の真価は伝え難い。原詩で味うしかない。その事情は「センザンコウ」の場合も同様であるが。

「雄鶏」の大部分はフロリダで書いたと、1977年の会見で、Bishop は語っているが、<sup>(67)</sup> 1、2年前に友人たちに朗読を頼まれてみて、突如、女権拡張論冊子“a feminist tract”のようだ、とこの詩を思ったが、作詩当時は勿論、夢にもそのような意図はなかったとも話した。第6連から7連辺りを始めとして、現在の眼では、feminist たちからも讃辞を得られる詩に相違ない。全く、Bishop 自身の言葉通り、「時代の推移によって、事情がどのように作者に好転するか分らないものである」し、その意味で、この作品は、文学作品の有する運命そのものを象徴している作品と言えよう。「センザンコウ」のほうに、女権拡張論冊子の趣きは、まず、読み取れまい。

尚、先刻も触れた Bishop の作品“The Armadillo”（アルマジロ）は、1957年6月22日号の *New Yorker* に発表され、Robert Lowell への献辞が付いていたものだが、この、アルマジロなる動物、熱帯アメリカに産するアルマジロ科の夜行性哺乳動物の総称で、その一種ココノオビアルマジロなどは骨質の鎧で被われていて、敵に会うと球状になって身を守る性質を有している。Bishop にとってのセンザンコウといってよいであろう。23歳年長の先達 Moore の影響は、Bishop にとって並み並みならぬものがあつたことは、こういうところからも窺えよう。

## 4. セステイーナ

Bishop は生涯に、Sestina という詩型を二度試みた。既に触れたように1956年に発表した、そのものずばりの標題の“Sestina”<sup>(68)</sup>と、若書きの“A Miracle for Breakfast”「朝食への奇蹟」である。これは1937年7月号の *Poetry*, 50, に発表されたもので、処女詩集『北と南』*North & South* (1946) に収録された。<sup>(69)</sup> この第1詩集に収められた多くの詩と同様に、この作品も初出の前に、Moore に送って見てもらい、色々な示唆を受けたことが、Moore 宛ての Bishop 自身の書翰 (1936年9月15日付, 1937年1月5日付, 同年1月19日付) から窺える。<sup>(70)</sup> Moore は、Bishop の弱気を慰めたり、第6連の“gallons of coffee”を「乱暴な」(boisterous) と評したらしいし、crumb と sun を使ったのは大失敗だとか、第2連の2行目の初めの部分“it was so cold”などを“In the bitter cold”に変えたらどうかなどと示唆したようだ。上記の最後の手紙で、そのように変更した、と言っているが、実際は変えなかったことが、発表した作品で判る。25,6歳の Bishop, なかなかしたたかでもあった。

Bishop の最初の手紙では、この詩が一つには曖昧である点で、もう一つは、「あなたの<影響>を——それが本当だとして——ひどく不作法に示している点で、全くの失敗だと思います」と語り、「セステイーナは全く一種の離れ業(stunt)」だとも述べている。二番目の手紙では、gallons を5行上の galleries と近づけておきたいので「乱暴さ」には目をつぶりたいと言い、「ある特定の失敗がなければ、存在の手段がなくなるような事柄」の類だと、sun と crumb のことを考えていると言い、セステイーナを可能にする方法は二つあると思うと言う。行末語に、普通でない異様な語を、それもなるべくしばしば、異なった使い方を使わねばならない。ムーアの言うような「規模の変化」をつけて。そうすれば味の濃厚な詩になるだろう。もう一つの方法は、Sydney がやったように、可能な限り色のない語を使うことで、そうすればその詩はそれだけ幻覚が少なくなって、自然な主題やその変奏がもっと多くなるだろう。自分は同時にこの二つのことをやろうとしたのだと思う、と。

その Bishop の意欲的な若書きの作品を全訳で示してみよう。セステイーナとは、周知のように、6行6連体半詩節付の詩型で、6箇の単語を、6連のいずれにおいても、行末に用いるもので、その用い方に特殊な約束があり、各連最後の行末語が次連最初の行末語になり、各連で同語は同じ行にはこないように使う。半詩節3行には、この6箇の単語を2箇ずつ、1箇は行末に、他は行の中に使う、という凝った詩型である。この作品での6語は、coffee, crumb,



balcony, miracle, sun, river, である。拙訳では下線を付した。

### 朝食への奇蹟

六時に私たちはコーヒーを待っていた。  
 コーヒーと慈悲深いパン屑とを  
 とある露台から供される筈のを、  
 ——昔の王様がたのように、あるいは奇蹟のように。  
 まだ暗かった。太陽の一足が  
川の長いさざ波の上をしっかり乗った。

その日の最初の渡し船が 川を横切っていったばかりだった。  
 大変寒かったので私たちはそのコーヒーが  
 うんと熱ければいいと希った、太陽は  
 私たちを暖めてくれそうになかったので、そしてそのパン屑も  
奇蹟によって各々が一本のパンになって、バターが塗られればと希った。  
 七時に一人の男が露台に歩み出てきた。

彼はしばらく一人で露台に立っていた  
 私たちの頭越しに川のを眺めながら。  
 召使いが彼に 奇蹟の材料を手渡した  
 それは成り立っていた カップ一杯だけのコーヒーと  
 一本のパンとから、それを彼はパン屑にくずし始めた  
 頭を、いわば雲の中に入れて——太陽と共に。

その男は気が狂っていたのだろうか。何たることを太陽の下で  
 彼はしようとしていたことか、その、彼の露台にのぼって！  
 各々人は、相当固いパン屑を一つ一つ受け取って  
 ある者は蔑むようにはじき飛ばした 川の中へ  
 カップの、コーヒーの一滴の中へ。  
 私たちのある者は辺りに立ったまま、奇蹟を待っていた。

次に私が何を見たかを語ろう、それは奇蹟ではなかった。  
 美事な邸宅が太陽の中に立っていて  
 その扉、扉からは熱いコーヒーの香りがしてきた。  
 前の、バロック様式の白い漆喰の露台には

小鳥たちが加わってきていた、川一帯を巣にしていたのだ  
——私はその様を見ていた 片眼はパン屑にじっと注ぎながら——

そして回廊や大理石の部屋部屋にも。私のパン屑  
私の豪邸は、奇蹟によって私のために作られていた、  
長い年月の間に、昆虫たち、小鳥たち、石に細工する川  
によって。毎日毎日、太陽の下で  
朝食の時刻に 私は私の露台に座り  
両足を持ち上げたまま コーヒーをがぶ飲みする。

私たちはパン屑を舐め上げてはコーヒーを飲み込んだ。  
川向うの窓が 太陽を捉えた  
まるで奇蹟が生まれつつあるかのように、おかしな露台の上に。

<セスティーナ>などという詩型は全くの離れ業だ、と Moore に嘆いて  
みせた Bishop であったが、美事な出来栄えの作品である。一読直ちに、Stevenson の言う通り、寓話——キリストがパン屑から無数の人々の飢えを救ったという話の現代版、もしくは、聖餐の儀式の一変型——だと受け取れよう。(71) この作品を書いていた時、作者自身にはそんなつもりはなかったと言ったそうだが、これも Stevenson の言う通り、Bishop の主張が真実だという証拠は、どこにもない。「寓話」だという証拠は、作中に在る。まず、大抵の読者が、キリストの奇蹟の話などを想起するだろうから。だが、別に、キリストの寓話は思い浮かばずともいいので、倫理的な意味合いは、読者の心にそれぞれに、しかと沁み込むし、浮かび上ってくるであろう。早朝、食事を待っている間に、「私」の想像裡に展開する美しい場景が、現実の目の前の風景と微妙に交差してゆく。「私」の住んでいる豪邸は、奇蹟によって、「私」の得たパン屑が変容したものだ、と、「私」は想像するのである。「私」は小鳥のために撒かれたパン屑を眺めながら、心に浮んだ「一人の人」からパンを与えられるという慈悲を受ける窮民の一人といつの間にか化してしまう。コーヒーもパン屑も、ごくありふれたもので、ありふれた場景を扱いながら、決して凡庸でない世界を浮き上がらせているのではないか。コーヒーとパン屑が、太陽と川の光の中で露台から生み出した奇蹟、が、この詩そのものと言えよう。こういう作品を若年にして書き得たのも、Bishop が、時代の精神上の窮境にあっても、その苦しい状態を、激烈にとか、皮肉にとかではなく、陽気に常に笑い飛

ばすことが出来たからだ、と Stevenson はみている。<sup>(72)</sup> 窮境が、Bishop にはかえって希望の根拠となるのだと。この作品の中の、気まぐれではあるが、深遠でなくはない一連のイメージの中で、否定ではなく、倫理的な肯定を我々は与えられるのだと。Bishop の若年にして早くも身につけた、現実観察力と想像力との均衡のとれた感覚のせいで、にちがいあるまい。

(1986・9・10)

(注)

- 1) 最初の出逢いについて詳しくは、拙稿「エリザベス・ビショップとマリアン・ムーア」(*American Literature Tsukuba*, II, Jan. 1987, pp. 40-50.) を参照されたい。
- 2) "Efforts of Affection :A Memoir of Marianne Moore" in Robert Giroux, ed., *Elizabeth Bishop: The Collected Prose* (Chatto&Windus・The Hogarth Press, 1984) p. 137.
- 3) *Elizabeth Bishop: The Complete Poems 1927-1979* (Farrar・Straus・Giroux, 1980) この全詩集には、他にも、ポルトガル語やスペイン語などから Bishop が英訳した詩も収録されている。
- 4) Harold Bloom, ed. & introduction, *Elizabeth Bishop* (Chelsea House Publishers, 1985) p. 5.
- 5) Joe David Bellamy, ed., *American Poetry Observed: Poets on Their Work* (Univ. of Illinois Press, 1984) p. 61.
- 6) *Ibid.* p. 59.
- 7) *Quarterly Review of Literature*, 4 ([Spring] 1948), pp. 127-28. に初出。
- 8) 全訳は、注(1)の拙稿にある。それを参照されたい。
- 9) Anne Stevenson, *Elizabeth Bishop* (Twain Publishers, 1966) p. 46.
- 10) Candace W. MacMahon, *Elizabeth Bishop: A Bibliography 1927-1979*. (The Univ. Press of Virginia, 1980) p. 152.
- 11) Anne Merrill Greenhalgh, *A Concordance to Elizabeth Bishop's Poetry* (Garland Publishing, Inc. 1985)
- 12) *Ibid.* pp. 898-921.
- 13) Bellamy, p. 58. [(5)の編著]
- 14) *Ibid.* pp. 59-60.
- 15) *Ibid.* p. 59.
- 16) Giroux, p. 122. [(2)の編著]
- 17) 上掲(1)の拙稿 p. 49参照。
- 18) 拙稿「現代英米詩覚え書(2)——エリザベス・ビショップ」(『楡』No. 2. 1983年11月) pp. 12-14. に全訳あり。
- 19) Giroux, "Introduction. viii~ix" [(2)の編著]
- 20) 上掲(18)の拙稿参照。
- 21) Bellamy, p. 55.
- 22) Giroux, p. 134. (1)の拙稿も参照。
- 23) 拙稿「現代英米詩覚え書(19)——現代詩の Sestina」(『楡』No. 19. 1986年9月) pp. 16-20. "Sestina"の全訳もその中にあるので参照されたい。

- 24) Bellamy, p. 48.
- 25) Bishop が Moore に始めて逢った時も Moore はつば広帽子をかぶっていたし、彼女の帽子好きについては Bishop 自身もそう語っている。cf. Giroux, p.124.
- 26) Stevenson, p. 134. [上掲(9)の著]
- 27) 上掲(3)の『全詩集』pp. 35-39. に収録。
- 28) Giroux, p. 145. [上掲(2)の編著]
- 29) *Reynard the Fox* の中の雄鶏の名前。
- 30) バチカンのサンピエトロ大聖堂。
- 31) The church of St. John Lateran. ローマ司教としての教皇の大聖堂。
- 32) 聖ペテロのこと。
- 33) Stevenson, p. 122.
- 34) *Ibid.* p. 125.
- 35) *Ibid.* pp. 124-25.
- 36) 上掲(1)の拙稿に全訳あり。参照されたい。
- 37) Pamela White Hadas, *Marianne Moore. Poet of Affection* (Syracuse Univ. Press, 1977) p. 92.
- 38) *The Complete Poems of Marianne Moore* (The Viking Press, 1981) pp. 117-20.
- 39) 未詳
- 40) 未詳
- 41) ギリシャ神話の、ライオンの胴に鷲の頭と翼などを持つ怪獣。Scythia に住み、その地の黄金を守ると信じられた。dragon と並んで架空の動物では、紋章に最も多く登場するので、「グリフィンと化す」(と動詞形に使っている)とは、紋章化するということ。
- 42) three R's (writing, reading and arithmetic) とは言うが、ここでもう一つ付け加えられたのは griffon (グリフィンと化す) か。
- 43) Ann Winslow, ed., *Trial Ballances* (The Macmillan Co. 1935) に、“The Reprimand”, “The Map”, “Three Valentines” の3篇が、Marianne Moore の解説付きで載った。cf. MacMahon, p. 120 [上掲(10)の美事な Bibliography]
- 44) Stevenson, p. 45.
- 45) Hadas, p. 117.
- 46) Bonie Costello, *Marianne Moore: Imaginary Possessions* (Harvard Univ. Press, 1981) p. 115.
- 47) *Ibid.* p. 122.
- 48) *Ibid.* p. 122.
- 49) *Ibid.* p. 125.
- 50) *Ibid.* p. 126.
- 51) *Ibid.* p. 127.
- 52) *Ibid.* p. 128.
- 53) *Ibid.* p. 123.
- 54) *Ibid.* p. 129.
- 55) *Ibid.* p. 130.
- 56) Stevenson, p. 134.
- 57) *Ibid.* p. 134.

- 58) Giroux, pp. 145-46.  
 59) MacMahon, pp. 148-49.  
 60) *Ibid.* p. 149.  
 61) 上掲(18)の拙稿に全訳あり。  
 62) Bloom, pp. 34-35. [上掲(4)の編著]  
 63) *Ibid.* pp. 111-20.  
 64) *Ibid.* p. 111.  
 65) *Ibid.* p. 114.  
 66) *Ibid.* p. 119.  
 67) Bellamy, p. 54. [上掲(5)の編著]  
 68) 詩集 *Questions of Travel* に収録された。上掲(3)『全詩集』の pp. 123-24, 及び(23)の拙稿の全訳参照。  
 69) 上掲(3)の『全詩集』pp. 18-19.  
 70) MacMahon, pp. 143-44. [上掲(10)のBibliography]  
 71) Stevenson, p. 62.  
 72) *Ibid.* p. 60.

## Roosters

At four o'clock  
 in the gun-metal blue dark  
 we hear the first crow of the first cock

just below  
 the gun-metal blue window  
 and immediately there is an echo

off in the distance,  
 then one from the backyard fence,  
 then one, with horrible insistence,

grates like a wet match  
 from the broccoli patch,  
 flares, and all over town begins to catch.

Cries galore  
 come from the water-closet door,  
 from the dropping-plastered henhouse  
 floor,

where in the blue blur  
 their rustling wives admire,  
 the roosters brace their cruel feet  
 and glare

with stupid eyes  
 while from their beaks there rise  
 the uncontrolled, traditional cries.

Deep from protruding chests  
 in green-gold medals dressed,  
 planned to command and terrorize the  
 rest,

the many wives  
 who lead hens' lives  
 of being courted and despised;

deep from raw throats  
 a senseless order floats  
 all over town. A rooster gloats

over our beds  
 from rusty iron sheds  
 and fences made from old bedsteads,

over our churches  
 where the tin rooster perches,

over our little wooden northern houses,  
 making sallies  
 from all the muddy alleys,  
 marking out maps like Rand McNally's:  
 glass-headed pins,  
 oil-golds and copper greens,  
 anthracite blues, alizarins,  
 each one an active  
 displacement in perspective;  
 each screaming, "This is where I live!"  
 Each screaming  
 "Get up! Stop dreaming!"  
 Roosters, what are you projecting?  
 You, whom the Greeks elected  
 to shoot at on a post, who struggled  
 when sacrificed, you whom they labeled  
 "Very combative..."  
 what right have you to give  
 commands and tell us how to live,  
 cry "Here!" and "Here!"  
 and wake us here where are  
 unwanted love, conceit and war?  
 The crown of red  
 set on your little head  
 is charged with all your fighting blood.  
 Yes, that excrescence  
 makes a most virile presence,  
 plus all that vulgar beauty of  
 iridescence.  
 Now in mid-air  
 by twos they fight each other.  
 Down comes a first flame-feather,  
 and one is flying,

with raging heroism defying  
 even the sensation of dying.

And one has fallen,  
 but still above the town  
 his torn-out, bloodied feathers drift  
 down;

and what he sung  
 no matter. He is flung  
 on the gray ash-heap, lies in dung

with his dead wives  
 with open, bloody eyes,  
 while those metallic feathers oxidize.

St. Peter's sin  
 was worse than that of Magdalen  
 whose sin was of the flesh alone;

of spirit, Peter's,  
 falling, beneath the flares,  
 among the "servants and officers."

Old holy sculpture  
 could set it all together  
 in one small scene, past and future:

Christ stands amazed,  
 Peter, two fingers raised  
 to surprised lips, both as if dazed.

But in between  
 a little cock is seen  
 carved on a dim column in the  
 travertine,

explained by *gallus canit*;  
*flet Petrus* underneath it.  
 There is inescapable hope, the pivot;

yes, and there Peter's tears  
 run down our chancicleer's  
 sides and gem his spurs.

Tear-encrusted thick  
 as a medieval relic  
 he waits. Poor Peter, heart-sick,  
  
 still cannot guess  
 those cock-a-doodles yet might bless,  
 his dreadful rooster come to mean for-  
     giveness,  
  
 a new weathervane  
 on basilica and barn,  
 and that outside the Lateran  
  
 there would always be  
 a bronze cock on a porphyry  
 pillar so the people and the Pope might  
     see  
  
 that even the Prince  
 of the Apostles long since  
 had been forgiven, and to convince  
  
 all the assembly

that “Deny deny deny”  
 is not all the roosters cry.

In the morning  
 a low light is floating  
 in the backyard, and gilding  
  
 from underneath  
 the broccoli, leaf by leaf;  
 how could the night have come to grief?

gilding the tiny  
 floating swallow’s belly  
 and lines of pink cloud in the sky,

the day’s preamble  
 like wandering lines in marble.  
 The cocks are now almost inaudible.

The sun climbs in,  
 following “to see the end”,  
 faithful as enemy, or friend.

### THE PANGOLIN

Another armored animal—scale  
     lapping scale with spruce-cone regularity until they  
 form the uninterrupted central  
     tail-row! This near artichoke with head and legs and grit-equipped gizzard,  
 the night miniature artist engineer is,  
     yes, Leonardo da Vinci’s replica—  
     impressive animal and toiler of whom we seldom hear.  
 Armor seems extra. But for him,  
     the closing ear-ridge—  
     or bare ear lacking even this small  
     eminence and similarly safe  
  
 contracting nose and eye apertures  
     impenetrably closable, are not;—a true ant-eater,  
 not cockroach-eater, who endures  
     exhausting solitary trips through unfamiliar ground at night,  
     returning before sunrise; stepping in the moonlight,  
     on the moonlight peculiarly, that the outside

edges of his hands may bear the weight and save the claws  
 for digging. Serpented about  
 the tree, he draws  
 away from danger unpugnaciously,  
 with no sound but a harmless hiss; keeping

the fragile grace of the Thomas-  
 of-Leighton Buzzard Westminster Abbey wrought-iron vine, or  
 rolls himself into a ball that has  
 power to defy all effort to unroll it; strongly intailed, neat  
 head for core, on neck not breaking off, with curled-in feet.  
 Nevertheless he has sting-proof scales; and nest  
 of rocks closed with earth from inside, which he can thus darken.  
 Sun and moon and day and night and man and beast  
 each with a splendor  
 which man in all his vileness cannot  
 set aside; each with an excellence!

“Fearful yet to be feared,” the armored  
 ant-eater met by the driver-ant does not turn back, but  
 engulfs what he can, the flattened sword-  
 edged leafpoints on the tail and artichoke set leg-and body-plates  
 quivering violently when it retaliates  
 and swarms on him. Compact like the furled fringed frill  
 on the hat-brim of Gargallo’s hollow iron head of a  
 matador, he will drop and will  
 then walk away  
 unhurt, although if unintruded on,  
 he cautiously works down the tree, helped

by his tail. The giant-pangolin-  
 tail, graceful tool, as prop or hand or broom or ax, tipped like  
 an elephant’s trunk with special skin,  
 is not lost on this ant-and stone-swallowing uninjurable  
 artichoke which simpletons thought a living fable  
 whom the stones had nourished, whereas ants had done  
 so. Pangolins are not aggressive animals; between  
 dusk and day they have the not unchain-like machine-like  
 form and frictionless creep of a thing  
 made graceful by adversities, con-

versities. To explain grace requires  
 a curious hand. If that which is at all were not forever,



why would those who graced the spires  
 with animals and gathered there to rest, on cold luxurious  
 low stone seats—a monk and monk and monk—between the thus  
 ingenious roof-supports, have slaved to confuse  
 grace with a kindly manner, time in which to pay a debt,  
 the cure for sins, a graceful use  
 of what are yet  
 approved stone mullions branching out across  
 the perpendiculars? A sailboat

was the first machine. Pangolins, made  
 for moving quietly also, are models of exactness,  
 on four legs; on hind feet plantigrade,  
 with certain postures of a man. Beneath sun and moon, man slaving  
 to make his life more sweet, leaves half the flowers worth having,  
 needing to choose wisely how to use his strength;  
 a paper-maker like the wasp; a tractor of foodstuffs,  
 like the ant; spidering a length  
 of web from bluffs  
 above a stream; in fighting, mechanicked  
 like the pangolin; capsizing in

disheartenment. Bedizened or stark  
 naked, man, the self, the being we call human, writing-  
 master to this world, griffons a dark  
 “Like does not like like that is obnoxious”; and writes error with four  
 r’s. Among animals, *one* has a sense of humor.  
 Humor saves a few steps, it saves years. Unignorant,  
 modest and unemotional, and all emotion,  
 he has everlasting vigor,  
 power to grow,  
 though there are few creatures who can make one  
 breathe faster and make one erecter.

Not afraid of anything is he,  
 and then goes cowering forth, tread paced to meet an obstacle  
 at every step. Consistent with the  
 formula—warm blood, no gills, two pairs of hands and a few hairs—that  
 is a mammal; there he sits in his own habitat,  
 serge-clad, strong-shod. The prey of fear, he, always  
 curtailed, extinguished, thwarted by the dusk, work partly done,  
 says to the alternating blaze,  
 “Again the sun!

anew each day; and new and new and new,  
that comes into and steadies my soul."

### A Miracle for Breakfast

At six o'clock we were waiting for  
coffee,  
waiting for coffee and the charitable  
crumb  
that was going to be served from a  
certain balcony,  
—like kings of old, or like a miracle.  
It was still dark. One foot of the sun  
steadied itself on a long ripple in the  
river.

The first ferry of the day had just  
crossed the river.  
It was so cold we hoped that the coffee  
would be very hot, seeing that the sun  
was not going to warm us; and that the  
crumb  
would be a loaf each, buttered, by a  
miracle.  
At seven a man stepped out on the  
balcony.

He stood for a minute alone on the  
balcony  
looking over our heads toward the river.  
A servant handed him the makings of a  
miracle,  
consisting of one lone cup of coffee  
and one roll, which he proceeded to  
crumb,  
his head, so to speak, in the clouds—  
along with the sun.

Was the man crazy? What under the sun  
was he trying to do, up there on his  
balcony! ↗

Each man received one rather hard ↙  
crumb,  
which some flicked scornfully into the  
river,  
and, in a cup, one drop of the coffee.  
Some of us stood around, waiting for the  
miracle.

I can tell what I saw next; it was not a  
miracle.  
A beautiful villa stood in the sun  
and from its doors came the smell of hot  
coffee.  
In front, a baroque white plaster balcony  
added by birds, who nest along the river,  
—I saw it with one eye close to the  
crumb—

and galleries and marble chambers. My  
crumb  
my mansion, made for me by a miracle,  
through ages, by insects, birds, and the  
river  
working the stone. Every day, in the  
sun,  
at breakfast time I sit on my balcony  
with my feet up, and drink gallons of  
coffee.

We licked up the crumb and swallowed  
the coffee.  
A window across the river caught the  
sun  
as if the miracle were working, on the  
wrong balcony.